十勝・帯広のおおらかさにこそ価値がある

今年は、帯広畜産大学 学長 奥田 潔さんを迎え、米沢市長とこれまでの経験や、大学と帯広市の取り組みから見えてくる、十勝・帯広の価値や可能性について語っていただきました。（帯広畜産大学にて）

問い合わせ　広報広聴課（市庁舎３階、☎65・4109）

二人の共通点 3つの「ふるさと」

市長　奥田学長が母校の学長に就任されてから、早いもので1年がたとうとしています。その間、二人でじっくりと話す機会が持てずにいたので、本日の対談をとても楽しみにしていました。

　実は、私と奥田学長の、ある共通点を見つけたんです。それは、「生まれ育ったふるさと」「都会というふるさと」、そして「海外というふるさと」。この3つの「ふるさと」を持っていることです。

　私は高校までを帯広で過ごし、法律の勉強をするため札幌の大学に進学し、最初の就職地は東京でした。その後、海外勤務となり、中近東のアブダビ、アフリカのアルジェリア、イギリスのロンドンと、海外で8年程生活しました。

奥田　私は岩手県盛岡市生まれの京都育ちです。京都で18年間を過ごした後、帯広畜産大学（以下、畜大）の獣医学科の学生として帯広で生活しました。学生時代に交換留学生としてドイツに渡り、帰国後は畜大の教員として帯広に戻り、帯広には学生時代と合わせて11年間いました。その後、岡山で大学の教授として27年間暮らし、今回、再度のご縁で帯広に来ることになりました。

市長　ドイツに留学を決めた理由は何だったんですか。

奥田　大学生のとき、当時の西川義正学長には、ご自身の研究分野の先進地であるドイツに、畜大生を行かせて学ばせたいとの思いがありました。そこで、学長と同じ研究分野であった私は、ゼミの先生から「奥田、選考試験を受けてみないか」と言われたんです。当時、私は空手道に夢中で、それなりの成績を残すくらい一生懸命やっていました。でも、このままでは就職できないだろうと思っていたときに、その話をいただきました。受けたら受験者が私一人で。即、決まりました。

二人　（笑）

市長　私と似ているなと思いました。私は中学から大学までずっとバレーボールをやっていました。いわゆる体育会系です。

　その後、大学に残る準備をしていましたが、就職試験も受けてみようと思い、いくつかの会社の面接に行きました。その中の一社、石川島播磨重工業（現ＩＨＩ）の受験者が圧倒的にとがっていたというか面白かった。そこで大学の先生に相談したら「法律ばかにならないように1、2年、社会経験してきたらどうだ」と言われて就職したという経緯があります。

奥田　なるほど。お互いに先生の助言が、自分の決断の後押しになっていますよね。

市長　当時、ぼんやりと自分がやりたいものは持っていましたが、今から思えば、まだ世の中を分かっていない学生の頃で、先生の言葉に背中を押されて決断しました。一見すると主体性が無いようですが、今振り返れば、その時々の流れや環境にあらがうことなく、素直に受け入れることも重要ではないかと思いますね。

海外で意識した日本人の自分

奥田　私はミュンヘン大学で学位を取った後、同大学の助手をしながら獣医師として家畜病院で働き、ドイツで7年間を過ごしました。

　博士課程の学生だったとき、語学もできない中で、大学ではみんなが集まるコーヒーの時間が朝と午後にあるんですが、そのたびに仲間の学生から「お前は何のために来たんだ」と言われました。当時、明確な目的意識を持っていなかった私はそれに答えられず、とても歯がゆい思いをしていました。まさか、「先生に行けと言われたから」とも言えないですし。

二人　（笑）

奥田　私の専攻は臨床繁殖という人間でいう産婦人科の世界なのですが、ある日、心を決めて「研究者になるための勉強に来たんだ」とみんなの前で言い切りました。すると、自分の考えを明確に口に出したことが周りの後押しをもらうきっかけとなって、学位取得時に、先生から「さあ、次はどうする」と言われ「日本の研究室の教授になりたい」と言うと、「じゃあ、獣医師の資格を取って修行しなさい」ということで獣医師の資格を取り直すというふうに、どんどんレールができたという感じでした。

市長　口に出したことで、人生が切り開けていったわけですね。

奥田　ミュンヘンの語学学校ではさまざまな国の人たちが学んでいました。語学学校の試験での出来事なんですが、「男尊女卑について自国の現状を説明しなさい」と言われたんです。アメリカ人やフランス人など、彼らは自国の歴史や文化を踏まえて説明していましたが、私は答えるのに大変苦労しました。語学ができないから語れないのではなくて、日本の歴史や文化を知らないから語れなかったのです。自国をきちんと知ってこそ、他国を理解できるのだということを思い知らされました。

市長　私も20代で海外に出て、何が経験になったかと考えると、やはり文化・歴史・人種の違いを感じ、特に自分が日本人だということを強く意識させられたことです。

　ロンドン駐在の6年間、ある世界有数の投資銀行の役員会に定期的に参加していました。彼らの話についていこうと、英語の経済紙や雑誌を必死で読み込んでいましたが、質問されるのは「日本の税制はこういう場合どうなのか」「日本では民営化はどのくらい進んでいるのか」ということばかりです。相手は日本人としての私の考えや知見を聞きたいわけです。

　これをきっかけに、日本の雑誌を取り寄せて、英語で説明するにはどうしたらいいか、その作業に時間をかけるようになりました。まずは、日本人であることの自覚からのスタートでした。

広告

奥田　私も週刊誌を毎月送ってもらっていました。日本を知らないと話ができないんですよね。

市長　自分の考えを発言することが世の中でどれだけ重要か、海外で感じた挫折感がとても勉強になりました。

世界を知ることは自分を知ること

奥田　本当にそう思います。海外では自分の意思をしっかり伝えていかないと成立しない、そういう文化なんですよね。海外での経験は、今の学長としての仕事や畜大のさまざまな取り組みに生かしていけると思っています。

市長　私は、世界に通じる人というのは、さまざまな考えや価値観の違いの中で、自分は何者かとか、自分はどう考え、どうしたいんだということをしっかり持っている人だと思います。そして相手を尊敬しながら、相手の考えを理解することだと思います。

　ふと、小さな頃から母親に言われ続け、ずっと心に残っている「人に迷惑をかけないようにね」という言葉を思い出しました。

　自分をわきまえながら、相手の気持ちに配慮する。これは多分、日本人が昔から持っている、世界で生きていくために必要な教えの一つではないかと思うんです。私たちはそういったことを、小さい頃から親や周囲からしっかりと教えられていたのに、つい、都会や海外などの外の世界に目を向けるあまり、忘れてしまっているのかもしれません。

　今の日本は、子どもの育て方もそうですし、われわれ大人の生き方についても、自分が生きる上で大切にしている信念や理念を、あまり議論しなくても生きていける世界をつくってしまったのではないかと思います。

学長　アルファベットの「T」の文字の縦棒を専門性、横棒を視野の広さに見立てた、「T型人間」という言葉がよく使われます。大学でいうT型人間とは、専門知識を持ち、それを自由に操るための教養を持っていることです。

　たとえ海外に行ったとしても、自分の地域を知らなければグローバルになれないと思いますし、いずれ国際的な場で活躍していくためにも、学生には一般教養を積極的に学んでほしいと思っています。もちろん異文化を知り、自国の文化を伝えるためには語学や、相手に分かりやすく説明するためのプレゼンテーション能力も必要です。一般教養に加えて、語学もできればベストでしょうけれど。

市長　恐らく、そういったことを意識するようになれば、直接外国語で読んでみたい話してみたいという、外国語に対するモチベーションが上がってくる。今できなくても、少しも気にすることはないと思います。

変わらない畜大生の気質

市長　ところで、久しぶりに帯広へ戻ってこられて、畜大が変わったと感じることはありますか。

奥田　教育環境、研究環境は良い方向に大きく変わっています。

　畜大の学生は、やりたいことはまだ見つかっていないけれど、「北海道に行きたい」「農業や生物に興味がある」という気概を持った学生が多い気がします。そういう学生たちと接していると、畜大生の気質は昔と変わらない気がします。

市長　今のお話を聞いて、北海道には、都会にはないロマンや期待感を抱かせる魅力があるのではないかとうれしくなりました。

　畜大生には、人として生きる上で大切な食や動物など、根本的な人間とのつながりを学びたいという思いがあるんでしょうね。そこに引かれ、求めてくる人たちだから時代が変わってもその気質は変わらないということでしょうか。

奥田　まさしくそうだと思います。卒業生が都市へ流出していく大学が多い中で、畜大は7割が道外出身の学生ですが、卒業後、6割の学生が道内にとどまり、その多くは農業関連の職に就いています。

　畜大は国内唯一の農畜産獣医系の単科大学です。畜大生は、日本が誇る食の生産基地である十勝・帯広の広大なフィールドを舞台に、農畜産現場の実習をはじめ、食や農に関わる人々の熱意や真摯な姿勢に触れることを通じて、十勝・帯広の強さや可能性を感じているのでしょう。それが北海道に残る学生を増やしているのではないかと思っています。

地域に貢献する帯広畜産大学

市長　畜大は平成28年度、目指す方向性が「地域貢献」とする全国55の国立大学のうち、国からの運営費交付金の配分率がトップの118・6パーセントとなるなど、国からも高い評価を受けています。最近の取り組みを教えてください。

奥田　畜大は「食を支え、くらしを守る」人材の育成を通じて、地域や国際社会に貢献するというビジョンを掲げています。私は大学を核として、地域の産業が育ち、地域を活性化していくという形が理想だと思っています。

　十勝産小麦を原料としたパンの高品質化を目指し、満寿屋商店との共同研究を行っていて、その研究成果として「炊き種製法」を開発し、特許を出願しています。炊き種製法とは、小麦に大量の水を加え、おかゆのような状態にして炊いたものを製パンに使用する方法で、ふんわりとした軟らかさが特徴です。平成27年9月には、満寿屋商店が、その特許製法を利用した新食感の「WAドーナツ」を商品化しました。

共同研究で開発したWAドーナツ

　地域との関わりでは、よつ葉乳業と連携して酪農業の教育や研究を行っています。よつ葉乳業には、この地域の酪農業を発展させようと、十勝の酪農家たちによって創設された歴史があります。そのよつ葉乳業と、今の十勝の酪農後継者不足や、酪農家数の減少の流れを食い止めるために、畜大で酪農の後継者育成のための「デイリースクール」を開催しています。

　ここでは、酪農業に就農して3年目程度の人を対象に、乳牛管理など酪農家として必要な基礎知識を習得するための講義を行っています。

　地域の活性化では、学生が中心となって、市民や民間企業とまちなかの活性化に取り組む「十勝カレッジSILO」を立ち上げました。そのほか、市と「フードバレーとかち人材育成事業」で連携した取り組みを行っています。これには十勝管内から多くの人材が参加していて、近い将来を担うリーダーが育ってきています。

帯広畜産大学
学長　奥田（おくだ）　潔（きよし）さん

岩手県盛岡市生まれ。1977年、帯広畜産大学畜産学部獣医学科卒業。ミュンヘン大学獣医学部大学院博士過程修了。京都大学で農学博士の学位を取得。ミュンヘン大学、帯広畜産大学の助手を経て88年に岡山大学助教授、98年同大教授。農学部の学部長などを歴任。前任は同大大学院環境生命科学研究科教授。

広告

無料法律相談会　離婚、親権、消費者金融などの相談に弁護士が応じる。 **対**十勝管内在住のひとり親家庭の親　**日**1月20日（金）、13時～15時の間で1人30分　**定**先着4人　**場・申・問**1月13日（金）までに、電話で母子家庭等就業・自立支援センター（公園東町3、グリーンプラザ内、☎20・7751）へ。

市長　「まちなかに学生を連れてきたい」という思いがSILOの始まりでしたよね。海外では、大学を中心としてまちづくりが行われているところがあります。畜大の学生や卒業生たちが、市民と触れ合える環境を作るには、やはり実際にまちなかに出てきてもらい、若い人たちの社会的な動きを作り出す必要があると思います。

奥田　SILO事業の一つとして、ジンギスカンの食べ比べを通じて学生や市民、企業、生産者が交流する「ジンギスカン会議」を平成27年から中央公園で開催しています。十勝管内のジンギスカン店や精肉店の協力のもと、畜大生が企画・運営し、昨年は17店舗が参加して、1500人に来ていただき大好評でした。このほかにも、まちなかで世代や地域、国を越えて人々が出会い、学びあう「まちなか講義室」などを行っています。

　SILO事業は、今はまだ土壌をつくっている段階です。良い土壌にするにはまだ時間がかかるだろうと思っていますが、焦らずに、模索しながらやっていきたいと思っています。

市長　まちづくりには人材が重要だと思いますので、行政側からも、特に畜大生が、何かインパクトのあることを発揮できるように支援していきたいと思っています。学生が何かを発信することに対して市民も寛容ですし、発信力はすごくあると思っています。

農で生きられる地域をつくる

奥田　米沢市長はフードバレーとかちを旗印にまちづくりを進めていますが、その中で畜大がお役に立てることはなんでしょうか。

市長　最近、ある農業関係者に、「いまだに『フードバレーとかち』ってどういう意味と聞く人がいる」と言われました。その人は、「これまでずっと答えられなかったけれど、自分は『何かしてくれるのを待つのではなくて、これからの十勝の農業をこうしたいと自ら考え、行動することなんだ』と答えている」と言ってくれました。まさにわが意を得たり。

　私は、市民や企業が主体的に行動するための後押しをすることが政策だと思っています。十勝・帯広の強みはやはり「食」だと思います。フードバレーとかち、やっとここまできたなと感じています。

奥田　市民が、自分たちは主体的に何かやるんだという土壌が作られてきたということですね。

市長　最近では金融機関などが、平成27年から行っている「とかち・イノベーション・プログラム」で、「革新者」と呼ばれる面白いことを楽しくやっている人たちを講師に招き、十勝の人材と交流させています。

　人は感動や驚きから学ぶことが多いので、革新者の話にまずは驚き、そこから自分にもできるんじゃないかと思い始めるわけです。そういう出会いを演出しているのがとかち・イノベーション・プログラムです。地域の「稼ぐ力」をつくるには、稼ぐための人材をどうやってここに集めるかなんだと思っています。

　そのために、もう一度大学で学びたいとか、都会で勤めてみたけれど違うなと感じた人が、十勝・帯広のような土の匂いや自然を感じられる場所で生活したいと思ったときに改めて仕事につながるような勉強が、何年かできる場所をつくりたいと思っています。その拠点が畜大にあったとしたら、そういう人たちを帯広へ引っ張ってこられるのではないかと思います。

奥田　面白い切り口ですね。ドイツでは、30歳を過ぎた学生が大勢いるんです。仕事に就いてから入り直した人もいます。でも、みんな全く焦っていないんですね。しっかり自分の人生を見極めた上で、これをやろうと取り組んでいる。まさに目からうろこが落ちる思いでした。

市長　今日のお話のポイントの一つだと思いますが、何かを始めるのに年齢は関係ないですよね。地域間の競争力を高める上で、帯広の労働人口を増やすのは重要です。

　もし、畜大に他の大学にはない受け皿があって、そこで学んだ人たちがスキルを生かせる仕事に就き、こんな風に活躍しているというのが見えてくると、この地域の活性化の一つの方法になると思います。そんなことを畜大との連携の中で、実現できたらすばらしいなと思います。

学長　本当ですね。行政などと連携しながら、新しい価値を生み出していければと思います。教育機関として、この上なくやりがいのあることです。

「畜大がここにあること」が最大の地域の強み

市長　私は、畜大の最大の地域貢献は「帯広は畜大のある地域だからね」といわれることだと思います。畜大があるから帯広の牛は特別に見えるとか、畜大がそばにあるから安心という地域ブランドですね。

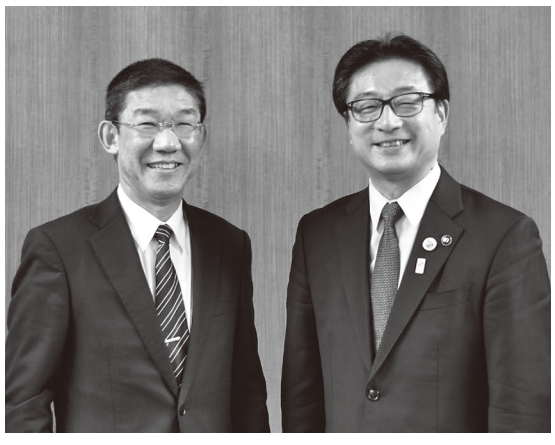
　そうすると、起業家などが東京や札幌で会社を起こすより、畜大がある帯広でやる方がマーケットから見てプレミアムがついて、それを活用しにやってくる。そう考えると、畜大がここにあるということこそが地域貢献であり、この地域の価値づくりにもつながるものと思っています。

学長　この地域のブランド化に、畜大が貢献できればうれしいです。

市長　十勝・帯広には空気がきれいで水がおいしいなど、いろいろな良さがありますが、そこにもう一つ、都会にはないゆったりとした時間の流れがあると感じています。時間の流れが他と違う分、この地域にはいろんな考え方やチャンスがあると評価されるようになれたらいいと思います。

　そして、十勝・帯広が多様な人が集まる「人材のるつぼ」になり、新しい価値がどんどん生まれてくる、そんな地域になる可能性があることを今日改めて強く感じました。

　また、十勝・帯広を、自分の目標をしっかりと持ち、人生を前向きに考える人たちでいっぱいにしたいですね。これも、グローバルな時代に生きていくために必要な一つの力だと思います。



奥田　私は大学を、普通よりも3年遅れて、さらに大学院の途中で1年留学したので、合わせて4年遅れて卒業しました。

　そのことにすごく劣等感を感じていましたが、海外ではなにも遅れていない。4年間で得た経験はすべて肥やしになっています。海外で、遅れていても余裕を持って勉強に励む人たちに出会い、なにも焦ることはないじゃないかと気付かされましたね。

　また、新たな発想やチャレンジには前向きな視点が大切です。あとはそれを受け入れられる土壌づくりが必要ですね。おおらかさを受け入れる素地がこの地域にはあるように感じますし、十勝・帯広のポテンシャル（潜在力）はやはり高いと思います。そういう点でも、十勝・帯広は先進的なまちだと思っています。

市長　本日の対談で帯広畜産大学、そして学長との距離がぐっと近づいた感じがして大変うれしく思います。これからの十勝・帯広の発展に力を合わせていきたいですね。

奥田　もちろんです。私も精一杯ふるさと十勝・帯広に恩返しできるよう頑張りたいと思います。

広告

「110番」の適切な利用をお願いします　110番は、事件事故などが発生した場合に警察へ緊急通報するための電話です。耳などが不自由な人の「メール110番」もあります。急を要しない相談などは、警察相談電話「＃9110」や最寄りの警察署、交番などを利用してください。　**問**帯広警察署（☎25・0110）